

特別講演 (Plenary Lecturer)

- 1) Professor Emeritus Dr. Satoshi Ōmura, Kitasato University, Japan
北里大学 名誉教授 大村 智(天然物化学)
- 2) Professor Dr. K. Barry Sharpless, The Scripps Research Institute, USA(有機合成化学)
- 3) Professor Dr. Amos B. Smith, III, University of Pennsylvania, USA(天然物有機合成化学)
- 4) Professor Emeritus Dr. Kuniaki Tatsuta, Waseda University, Japan
早稲田大学 名誉教授 竜田邦明(天然物合成化学)

概要:

国際抗生物質関連化学会議(International Conference on the Chemistry of Antibiotics and other bioactive compounds: ICCA)は、1988年にフランス(Aussois)で開催されて以来、ほぼ2年毎に世界中で開催されており、開催場所は、ヨーロッパが2回に1回、日本が4回に1回、アメリカが4回に1回程度の割合で開催されてきております。特に日本では、これまで1990年(大磯)で第2回国際会議(実行委員長;大野雅二先生)、を、さらには2002年(東京)で第8回国際会議(実行委員長;竜田邦明先生)を開催しており、いずれも約500人の研究者が参加し、わが国の化学の発展に大きく貢献いたしました。

本国際会議は、抗生物質を含む微生物由来の生理活性・生物活性物質の研究において直面している重要課題について、化学の立場から討議することを主目的としています。これまで、常に高いレベルでの議論が展開され、有機合成化学、医薬化学、微生物化学の基礎研究のみならず応用研究の将来展望につながる重要な提案がなされて参りました。その成果は回を重ねる毎に高く評価され、国際的に大きなインパクトを与え、今では、著名国際会議の一つとして世界的に認知されております。

このたび、第13回国際抗生物質関連化学会議を日本化学会、日本薬学会、日本農芸化学会、日本感染症医薬品協会および有機合成化学協会の後援を得て、2013年9月24日~27日、山梨県富士ビューホテル(富士山麓、河口湖湖畔)において開催いたす運びとなりました。

今回の第13回会議では、微生物由来の生理活性天然物の発見から構造決定、生合成、ケミカルバイオロジーそして特に有機合成化学の基礎研究から医薬品の工業的合成研究までを研究対象として第一線でご活躍の国内外の研究者約20名が特別講演を快諾して下さっておりますので、これまで以上の高いレベルの討議が展開され、生理活性物質・生物活性物質の合成および開発を通して、新規医薬品の探索、創製およびプロセスリサーチへの展開など、多くの成果が得られるものと確信いたしております。

本会議は、その学際的性格上、産学官の合成化学者、医薬化学者、生物化学者、プロセス研究者など、国内外の多数の研究者の参加(約250名)が見込まれています。そして多くの次世代を担う若い研究者や大学院生の参加が見込まれており、産官学連携の強化、さらには次世代研究者間の交流ならびに育成が多いに見込まれております。